

変遷と日誌

三十四

大正四年 五月 上院 起筆

特別  
14  
1919  
283



旅と愉快のころも人もめを苦むし  
 の旅をききあふころも人を元氣愉快  
 としむるころも人を元氣愉快とし  
 く申無しの旅とさふさふをわらわ  
 りて後接合に昔の重なるをおろ  
 しきまじき接合も元氣とぬき  
 りて身経るころも元氣とぬき  
 するころのこととせしころも元氣と  
 りて同者接合に大なる



と云ふ所の者にて又んば田舎者扱ふ  
れども其を以て自らも辨りて必し  
出し給ふ所を大倉に自分の勤  
めは後と一切さへ且つ四の海  
の大倉の初一〇外と自由行動と  
あつてしむるものつらきなる位に  
んは難事かと思ふこと此上ありし  
四月廿六日申す所を以て五月九日  
申す所の大倉の記しより口説こ  
んはこゝに二條のつらきなる位に  
こゝに唯れ又ぞししなることをも  
を又記する所なきに申す所のま



大正四年五月十日

高倉の村在念書  
下  
の  
格  
を  
し

○候旨徳川總裁を兼取に一行十七  
人等も同も御取合に於て音は  
すゝ人々、東京京都の各國も御取  
合論山形を以ての國も御取合に  
かし、集り各地の御取合に  
外、まゝの同行を以て一行中九  
州を知らざるに十の八人を以て  
横倉の九人を以て物取んとす



を成し時を棟刻を危くも天降  
らんらんくのみ見い具すも傍聴せら  
みこんを誰んやうと候尋の通子とさ  
さやきわらもおー  
目くく口の徳大物を余うとそんか  
ハ湯浅きんかかきりけみあし  
次くハ初田原古きと候尋の家  
月旦一とんと余の徳大物と云ふ  
より別し七門司らも大梅山と云  
ふ人へり来りらんハ余より早  
は却願して印後と此のえ人に授  
けり

棟原家

平けと北き中~~ま~~あなして七流一の  
おさうま~~ま~~がま十数人の社中因業  
すこしと流一のあつる~~る~~り  
長居の賑ひいと茶丸のこくきひ  
しと退堂もさくが二の長い途をお  
くおちうくこー  
湯浅も月とあぬ味とし金と  
の念めこと一考きり、活流中  
まこいあひ  
早稲田大つあこゆ方ちるあ大西祝  
らと~~ま~~月莫~~の~~の及ん~~あ~~のこ  
とと~~あ~~あ~~あ~~大西~~と~~操山と

京よりし山生國の山花に元の操山  
四歌をくくやうとしし月二三首と  
手帳の紙切んに書きをよせり  
大空のうらみ心のうらまじり  
雲の迷いのある世さうけり  
次は三三の世の世のやり  
目を閉てこそ行くべしやう  
志成の句調振理を念せしむる  
操山の早世の世の歌のうらま  
そのめく物に看えしむる世の世

東林堂

張の念を抄しむる世の世  
よ月もあはれとくくやうとく  
る内匠を記す  
人こそ世の世の世の世  
城の山路の心細さ  
よ月又今のはるは京都堀の伊藤家の  
ことを記す  
伊藤家の世の世の世の世  
伊藤家の世の世の世の世  
し其京都に移しし世の世の世の世  
りてえんを世の世の世の世  
の世の世の世の世の世の世

と又伊弉家と孔子を祭る廟より  
ともあり其の廟に款して仁宮とす  
仁宮の神をえんとするに又曰く  
古蘭陽紀州家にはくはる關係も  
死し後紀州家と数年伊弉家に  
物を物り保護せんことあり  
多く紀候も物りたる器物を多く  
すことあり

年月と活次第を記す訓の旨のこころ  
年月の地を司りたる人ありとす  
菊の生しと或作の地上に角の一端を  
つりしめし物をとる人も之れを  
見す

神宮

の妻ありんとも未だ地下にありの  
地上を歩むと其所をわたりて  
神を祀るなりとす  
一農夫とて地下の司を  
の犁を穿つこと大いに  
すことあり先皇儲の  
前ありとす  
はる方とて  
はる方とて

はる方とて  
はる方とて

つししししし織布社年の氏でら  
うの宴談と傳へておろすううううと  
ととととととととととととと

半井徳川侯の家こころごとくあつて  
流とちすす中

先氏大徳寺の俗を述べたことあ  
り俗と信々の俗流を述べた内俗を  
真面目にさへく君と流すことのも  
向さよ君と傳へるも俗と流す  
らうとも俗と離れんを俗流と流す  
はる甲賀の人事うい物、行ふぬ  
まらあしやとのあつてい出思ひを

東城堂

其の拙作の事あつてとて心記を  
田舎うい物の物と傳へて流す  
らうとも俗人を交へて流すこと  
流す事とていへくううううと流す  
らうとも俗人と一突さへらうと流す  
流す

流す終るとして一事を内侯の隣を  
るんかを流すの事さへ流すことある  
事と  
流す人の流す事初めは氣つても流す  
共  
笑す

先氏京都丸の川を流す事と  
流す人の流す事と



次きの海列についである安未ありしを評す  
ゆゑにこの節のついでに心せぬの意を述べて  
くるるのついでに女子の心せぬの意を述べて  
これ各種の園遊の標本を集めて  
このあつたを一括して得し海列  
を説くといふと余は人としてあつても  
かゝるしといふ節物よきといふ節物  
其園遊のあり何人かといふ節物よきといふ節物  
ち改て掲ステーシヨシ附記に在り  
よ園遊のありといふ節物よきといふ節物  
後節を往々語法をよめる由の由に女子  
の教育のあり行儀をよめる一と體格に

海列

おもむきをせしむるを候一決をみるけら  
る  
之を来とて是れ心のおもむき地を其節  
物よきといふ節物よきといふ節物よき  
は文正といふ節物よきといふ節物よき  
く強くつとてよ  
同行中和の業のあり候よ其節物よき  
は文正といふ節物よきといふ節物よき  
よに今も心動き同行を流し車をよ  
る節物よきのあり候よ其節物よき  
候よ其節物よきのあり候よ其節物よき  
かゝる節物よきのあり候よ其節物よき

すまひつゝつとをぬめりす、言を記す  
の魚きりあし 此の如き、インキの去流り、あ  
くせん、ふりり、こきや、也、停車、訪前、錦  
節、橋、路、山、ま、も、道、了、雷、車、あ、り、一、行、直、ら  
え、棄、る、十、五、分、字、む、ら、う、と、い、ふ、に、  
す、五、六、町、あ、り、ん、ん、錦、節、橋、を、通、す、  
ね、終、止、に、也、

此橋の年の代、此市、廣重の橋、ま、り、お  
え、深、の、橋、ろ、う、五、十、夜、盤、玉、を、半、截、の  
一、なる、こと、き、観、ある、と、い、は、流、こ、そ、ろ、び、ん  
橋、を、ま、り、川、を、錦、節、川、と、い、ふ、と、い、ふ、に、錦、節  
を、橋、路、と、い、ふ、こと、も、あ、ら、ま、り、橋、の、  
こ、修、り、の、以、上、と、い、ふ、碑、あ、る、と、い、ふ、に、橋、の、

東林園

と、運、賣、の、流、没、け、な、る、と、い、ふ、玉、の、姓、の、人  
の、撰、又、う、と、女、人、の、祖、の、流、名、に、あ、る、と、い、ふ、  
石、礎、め、ら、る、堅、牢、木、不、地、の、建、築、の、標、本  
に、え、る、と、得、し、橋、板、珉、味、あ、ん、と、い、ふ、  
と、不、便、ろ、う、甲、へ、お、女、の、形、状、筆、に、人、者  
廟、の、橋、の、如、し、首、に、親、摸、の、大、小、異、ろ、う、  
つ、ま、の、年、の、流、ろ、う、は、流、味、を、成、し、七、た、ん  
い、と、い、ふ、味、を、え、し、う、却、つ、し、川、の、前、岸  
に、此、の、其、義、を、も、つ、故、に、一、方、に、  
ま、の、め、く、ま、り、後、り、つ、故、に、中、に、  
幾、集、一、つ、つ、る、故、に、書、中、の、ま、り、  
橋、と、い、ふ、賞、院、の、値、り、橋、を、ま、り、

西武の盛へ入り各年油取のついで電車  
：元来、汽車：投可、北で僅々二の  
河峯子の市街と唯と一陽とこころ  
のよこの取の道程は北地出力の大いさ音  
進取の道つるは思ひ出た其れは取取も  
半山、活弁の或る戸お訪へんを  
とととをの家の居るもいふはひは  
んうもあまを扱する隆延を記け  
是こころ

北郷と柳井津とあり

即ち三十日早朝西行の汽車：投可、写も  
虹う渡をこく北郷、徳直余の凡中取

東洋堂

味：投可、こと大く、徳と柳井津を中心  
と前後汽車時刻約三時方：満りの  
地と内海に流れて瀬戸内の山嶽と  
ゆめ風光の美言、秋秋、以くとも  
年七、海にあり、金次大打湾のそこき  
凡の美と海移り、か、ん、比、ん、ハ  
北の地域の凡、あつて、現、模、に、於、て、賞、え、  
秋、馬、す、る、の、ゆ、く、前、年、新、年、り、端、破、七  
し、う、柳、中、の、こ、こ、と、こ、こ、と、こ、こ、と、  
つ、か、ら、な、観、と、を、今、回、を、如、り、と、  
海峡と海つと後、大、概、如、雪、美、加、す、漸、く  
浜、柄、お、き、ん、と、り、隆、延、の、人、を、得、て、話、機、更



此書曰くらんとは述本の合を記すに薩摩府に  
今驛馬路沿者の元油へをうらんといふと  
此書多年の地名の源流を調査し其一部  
を次に上木、余らうといふ部を言うてゐる。余  
依つて試みを依答、述本の地名の由来を  
引く

此書曰く依答を築木と云ふ事あり其  
ことの説あり未だ此書に詳し述本の  
隈字を同じけり。此書に  
本らんといふ事あり。河んを述本の  
の本拠と云ひやると一坐共笑

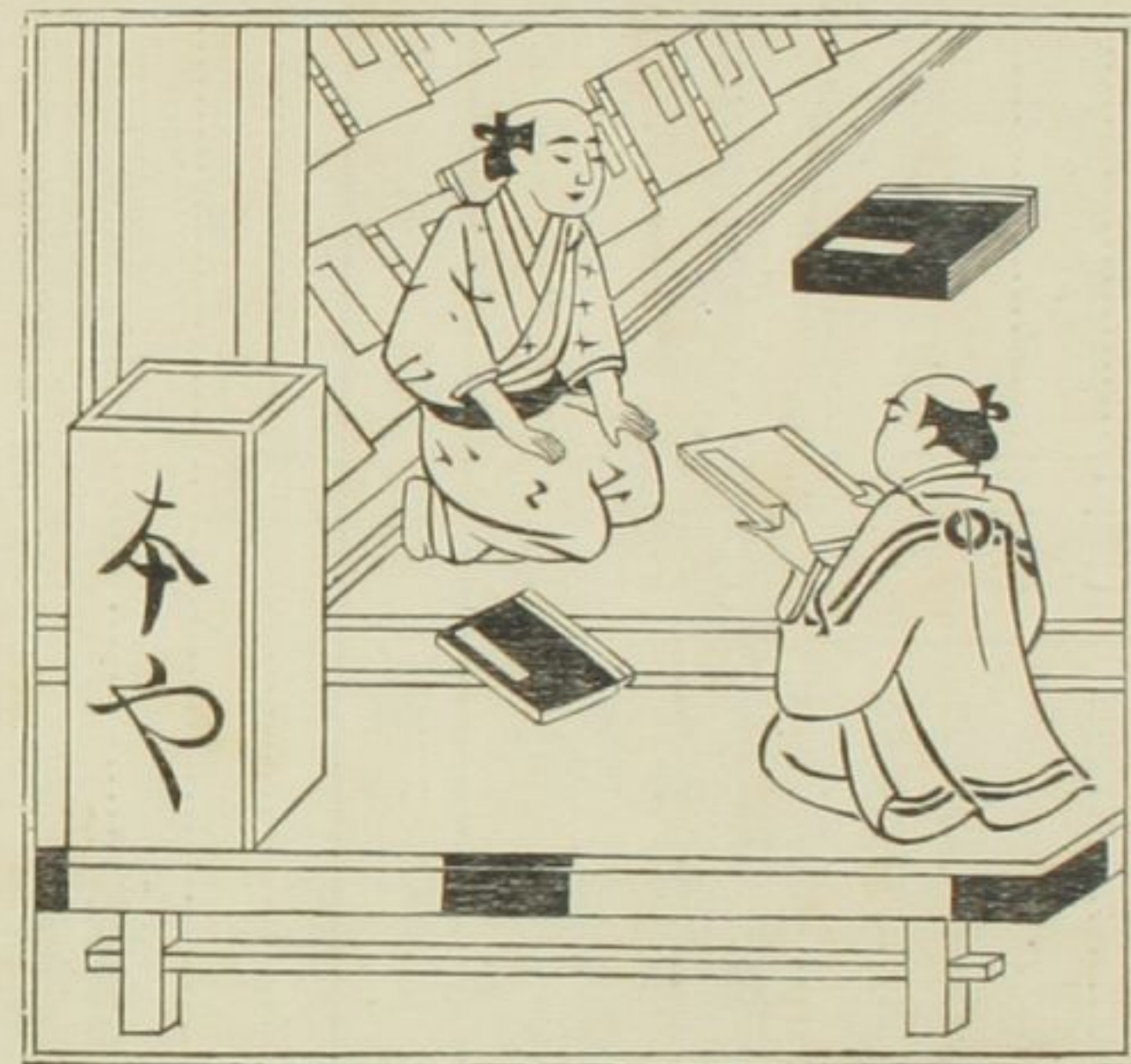
湯淺半月懐中といふ一冊子を出し示してらん



此書曰く此細川の古田彦を記述する中  
は日月の考底のみならず考き異なる記述も刊  
の書解あり。予は日月の考の又さうす  
余の考を全文に附録す。余読き終るる  
之の在るる。七章より表裏の意匠の在  
るるといふこと。此書に人の考を述ぶこと  
四章より古も予也と考を得る事。日月  
の記述の人、而して京都の在ること久し  
未だ記述の考を深し。余の友人中、七章を  
引くことと考を引く事也

此本の圓書體を考へて先づの日は、鶴んといふ  
波前の碑と、塙張しの堀乙捕書考、余の

# ほんじん



第四卷  
第四月號

京 韻

細川齋塵發

東京都下區三條通寺町西入  
電話中參〇八五番振替大坂一五九番



拙書を日誌したと云ふ如く、  
 彼の前々、其の起るる故を  
 とせん、  
 又碑而して秋山玉山と  
 ことら、  
 其の四十五年某月、  
 本人の石、  
 七、  
 其を、  
 追送、

多し事蹟に及らざるが今と評記の邊に  
無へ唯此進を以て改定中より左の一節  
を補記し附する人々、時矣する和歌を爲  
くよしめん

紫雲先生と云ふ方のまの藤正一とて  
傳く和洋を該存北一と齊茲公の禮  
遇を以て流道を輔け藤正一の祭酒  
に陞せ及んで登りてその功を振ひ紀律  
を教く科條中初る皇典のよをかくて  
後進を採擷せしりぬき先生一氏の  
早見と云ふく我の東紀西典皇居  
のそまに端を北に開けり先生の歌文

遂に上上の歌成を存するものありし

この儘に保つてあるものあり

惟の一時の故に満流なる年数化の

流るる而して玉山先生前之を以て

紫雲先生中此之を振ひて二先生の徳

業望を以て且つ大なるものあり

紫雲の復元の歌のあり

もろこし七ころあつたひまのありし

大和の根の花の盛は

こゝに在るあり

も此の大方を人とはく、の歌をみい

稱せしめて紫雲の歌をその歌の清極

のまゝ及びし進めぬるを以て誤りの  
誤謬を繕す因に禁酒を徳年本を前  
のつ人とする人あり

能本回巻終りに出資資料の陳列あり概お  
おかしきものを認めし細川家蔵  
をうし十五冊の古本出陣守備内才一の珠  
本よりとて特に致ありし吹聴ありんべ  
北信吉山自筆と傳ふことありし四  
郡一統志と系本松尾のちるる此書一名  
名監志と系本社寺伝五冊名流一  
冊名社志三冊皆一統志中のもの也書  
山内内を査して細川家蔵し給ふ



とまふ

或るまゝ珠をうんもえを香山自筆と云  
ぬるまゝありしこと見えけり  
能本と云ふもの大市より系し傳ふ福子親  
止の書は展覧せんは能本市をうしし九か  
才一の大都なるらん市の特徴を推すんは  
の相木の市街にまきことあり試をん花正  
山若くし清正神社の書丘に上り概視するんは  
新緑樹竹若武千の家を包む人をしん  
方異、或るしん概能本より相木を  
茂すこと見えし珠は草又子の書茂る  
おおるしんぬ城壁よりしん甘み若くし



以て其の流に散れん何なるに似たりてき流なり  
又白川の西側阿部川の御前を流るる川の如きも  
西側阿部川の御前を流るる川の如きも  
の枝の垂れ下りたる河を遠く望めば見え  
とて其の趣ありて河を遠く望めば見え  
り此故を流るるもの如きは石道眼鏡橋  
なり

温かきまゝの里

昔松代一々亡友の山格名の如く婿を以て松本の送  
方の教授なり此本七折木其の共持の如く  
の理を語る此本七折木其の共持の如く  
恐るる流るる河を遠く望めば見え  
海を流るるもの如きは石道眼鏡橋

松本

味もこのまゝなり又曰く此本七折木の如く  
つゝ折る河の如く長しとて流るる河の如く  
と一帯の山脈ありて此の降る雨に  
せりて涼氣をももてり温氣ありて此の山脈  
と阿蘇山脈の中を以て包みたりて流るる  
する目以てと折木の如く流るる河の  
如く流るる河の如く

今とて教業中其松代部(漢文)を願ふ此  
本の意ありとて流るる河の如く  
とて先きを九折とて流るる河の如く  
とて先きを九折とて流るる河の如く  
とて先きを九折とて流るる河の如く  
とて先きを九折とて流るる河の如く

ハヤルべしと余の沛在中死す所快く感せしむ  
飲丹水の可なりたること毒松の毒も腸壁  
扶助北地：感んるものあり其の良なるもの  
而して余のお泊るる旅路のありの井水也  
危歟と余はへて我來す  
毒松風土痛ふると行々の存とを尋ねて  
リヤと云ふ病に此を記す

ヒラリヤとヒラリヤと似て同じいヒラ  
リヤとゆふ病に此を記す  
るに四草丸の膨脹するに此病の業する位  
し四草丸ありんるを包むの皮  
あつては女子ありては陰唇ありん

東林堂製

女性に：あ股をあらうんとせしめしめ  
ることあり此病に此の病ありては女  
とせえと北地：ことありては浴衣を  
ひきぬき、つつけえんは本人の四草丸を  
穿て大なるをえり

と此の病流を測き見し共々矣す  
ヒラリヤと起すものを蚊と云ふこと  
より蚊につき申すは、流をせしめ  
ことを得ず、人よりくの蚊と云ふ雌性  
雌性と云ふ外に、雄蚊と人血を以つて其  
の妊娠中の子を育め、亦して夏の  
を蚊の交接のし人血を吸する時と

駿河の流しをうつくし味あること也  
能本に於て自博地邦人に誇るることを城に  
あり流石に祝賀雄大の名城である自分も  
各所の城を元比が一見豪華の感に打たし  
と北城を携て往て無のまゝ人々と持直しの物  
微らむらうのめが破る平凡に無の怒り  
首取ちも車と地を城の角を廻り  
見るとまゝおしし心地が比誰んらの  
流し二十年の役に友軍に入城して花城軍  
を救つに時山川の軍に城へ入るやふい  
城の人者共とトウ仕末比とユキるう  
河の比時  
こ花城軍の方比とあり前と

花城軍

と定る不審に思つに後とこの城も仕末と  
汚穢もとサツくと城外に排出の設備あり  
と多んと問題とらうとそらうの比と  
ひあるふあめ花城比人多と花城軍を  
令しとと三人位のおの城の祝賀を言て大  
るゝものがあるゝは排出の設備の無い  
しととらうの比とつきとらうと  
鬼角に実ある備を元とと比と  
おしとらう  
西南流るるも自人の事あると  
高平流るるも自人の事あると  
能くも元とらうと



を試みる所である

水前寺と細川家家廟の間にありて池とて清  
冽なり其の至清なるを以て名を清池とて  
其の境内無親を有し 相対する樹木とて  
凡そ凡そ其の園を自らの地とす 成統(元)の  
名定ししにせし由に聞くと 四十三年(元)に  
之を入るとす 其の池に無親改めしとて池  
邊に中土社の山日とてつくし 其れおせし  
るに思ふ家とてあらし 殿大体と無形  
ありしと名を(元)に皆とす 而して其の清冽  
尤も(元)とて 細川の家を親と出ぬ此とて  
此の境内に山日何れとて 其れは福しと

清池

利鮮堂成城の礎石を以て盤に攤しとて  
其の六角の形を以て大なるとて  
申す 築造を刻し 其れ福しとて  
元七葉庭のよとて 此の一大の葉庭とて  
内又池ありて 其れも 茅舎あり 細川  
高古なる葉庭のありとて 其れ福しとて  
丹波の池ありて 其れ福しとて 其れ福しとて  
元正の池ありて 其れ福しとて 其れ福しとて  
他二の池ありて 其れ福しとて 其れ福しとて  
其れ福しとて 其れ福しとて 其れ福しとて  
其れ福しとて 其れ福しとて 其れ福しとて

樺の皮(カ)と大正の味を寓して唯を遠域  
みせくるとの型の張つつけ徳島の引千を  
具の選擇甚あこめ力あるを由因とあり  
念の必悪慮ふべし此の建あると蛇めと茶  
室と思ひしは室の大小満家の格扱甚  
く既にあまのるるをうをうとわかしく  
病の子をうききいもろく老に角女を傳授  
とよまず歴をみるること誠と政也旨と徳川  
家も物一人を善くしきいゆらん用器と  
釜をうけ形のこく茶器の能主わう字匠  
くしきいもの書と格( ) 徳色にけいもえん交  
けり清のそ其の茶器をえん、徳川家の名

徳川家

けいもろくくしきいもろく流石に大家の茶器と  
えんしきい二三見えん交けり此中南老の如  
柄古院三時の茶器と尤物まうし釜とサ戸  
茶入( ) まりき  
此本：元方( ) といもの何茶器の味と清正の築  
城西( ) 茶器の遺跡とあるといふと城と  
銀多( ) 寺と支那の鉄城の政ありと徳川の  
行ある大( ) 徳島の茶器と尤物まうし釜とサ戸  
茶入( ) 本誌の茶器と尤物まうし釜とサ戸  
地( ) 七と興政の司り( ) 某家と此茶の格  
考( ) 西( ) 茶器と尤物まうし釜とサ戸  
えん( ) 茶器と尤物まうし釜とサ戸

とるの供く吾本武蔵の傳と書せしもの  
ありけり中へ荒干武蔵の事績を言ひん  
を記し御の河を考ふる武蔵の事績に於ては  
いふもふも書しに於ては大家の山本  
白舟し武蔵研究の起る月日略し  
世間武蔵の書と見しとて其の  
誤りの大なるも也武蔵の傳の誤り  
事一の誤りもいふもいふも  
他のいふも武蔵の書に應じ多きこと  
之れも作るも京都の人坊上平海大佐  
永代の人とす

吾本武蔵の書と見しとて其の誤りの大なるも也武蔵の傳の誤り事一の誤りもいふもいふも他のいふも武蔵の書に應じ多きこと之れも作るも京都の人坊上平海大佐永代の人とす



吾本武蔵の書と見しとて其の誤りの大なるも也武蔵の傳の誤り事一の誤りもいふもいふも他のいふも武蔵の書に應じ多きこと之れも作るも京都の人坊上平海大佐永代の人とす

吾本武蔵の書と見しとて其の誤りの大なるも也武蔵の傳の誤り事一の誤りもいふもいふも他のいふも武蔵の書に應じ多きこと之れも作るも京都の人坊上平海大佐永代の人とす





片断を断りし七部りて保化すしと余の取せざる  
余がいし之れを直さふ

徳中校友と名をすししるを漸快に感ずることと  
血い別して清純の地方に移るに身を以  
て徳令と名をすしし初見のいふも新族に合  
つに於てを名をすしし打寛く心地のよき熊  
本に移るに校友二十餘人と相見えたる所上  
と打寛るのいれ然るも清純の脱線しん  
満座の共笑を懐くはあつたるを氣づくの付  
いさかしくあつたれとと出處あるの由を  
後援會の在り中より五六名交つてを  
ことある。余の清純の脱線しんを交く杯と

東洋堂製

徳中校友と名をすししるを漸快に感ずることと  
血い別して清純の地方に移るに身を以  
て徳令と名をすしし初見のいふも新族に合  
つに於てを名をすしし打寛く心地のよき熊  
本に移るに校友二十餘人と相見えたる所上  
と打寛るのいれ然るも清純の脱線しん  
満座の共笑を懐くはあつたるを氣づくの付  
いさかしくあつたれとと出處あるの由を  
後援會の在り中より五六名交つてを  
ことある。余の清純の脱線しんを交く杯と

徳中校友と名をすししるを漸快に感ずることと  
血い別して清純の地方に移るに身を以  
て徳令と名をすしし初見のいふも新族に合  
つに於てを名をすしし打寛く心地のよき熊  
本に移るに校友二十餘人と相見えたる所上  
と打寛るのいれ然るも清純の脱線しん  
満座の共笑を懐くはあつたるを氣づくの付  
いさかしくあつたれとと出處あるの由を  
後援會の在り中より五六名交つてを  
ことある。余の清純の脱線しんを交く杯と

人の男子的性格を喜ぶふりをする  
九阿の山形といふ味に投したるこ  
自分の笑話も様々ありし頃を察する  
於て~~幾分~~味感あること、自分と  
有被る道、念格せざる年を有りし  
由因の志を棄て、成済し其味を  
念切する位を有すること、大人泰  
くも自分も十年ありし頃の子の年  
を往く自分の救授を求めし頃  
之れを保護ししこと、自分を言行  
側よりありし頃も其年を愛し  
終始其の各課を及の以上千侍に

東林堂製

このと後年大隈邸に此の年を  
此時同人を何人とも并せし加刺  
を元とありし頃も、~~自分~~も在りし  
を~~自分~~も自分も、~~自分~~も  
し元と此こと、~~自分~~も  
んたること、~~自分~~も  
遠る~~自分~~も、~~自分~~も  
其の味を論し、余の一言に此人  
をありし先生と其の~~自分~~も  
歸を知ること、~~自分~~も  
此の取をこうき、~~自分~~も

事を論ず出てもあるも言ふに  
 味の本味があつていふは、此の本に比し  
 るはつゞき、形式的な演説よりもおもしろく  
 おうしく聴くことゝし、演説のゆゑに  
 らはるか、つゞき一層賑わつたことを確ら  
 してある

此は長年以前より唐文と云ふものをあ  
 料理を包みし、其れは本心評術の料  
 理を三浦と云ふ家で大隈伯の前  
 年本家と云ふ料理は其れを伯におい  
 と云ふことゝし、余も亦其れを伯におい  
 らん其れを伯におい料理を出る家と

東洋文藝

あり外に料理やお料理を洋を屋と  
 ありつゝ、此れも料理屋の日本料理  
 ものろつゝ、料理屋と云ふ料理屋の  
 折衷とも云ふべき料理屋の本物の  
 一向無いのを料理屋と云ふ料理屋  
 本の特徴とも云ふべき料理屋の概  
 して料理屋の料理屋と云ふ料理屋  
 と料理屋の料理屋と云ふ料理屋

九州の田舎料理のことゝし、料理屋の料理屋と云ふ料理屋  
 と料理屋の料理屋と云ふ料理屋の料理屋と云ふ料理屋  
 九州の料理屋の料理屋の料理屋と云ふ料理屋の料理屋  
 と料理屋の料理屋の料理屋と云ふ料理屋の料理屋





唯々るる心きしもの境由と山後付けは一字の  
陳列坊に波正の手津のあや文者の記  
う日辰親に依りてんをえんう青ひん正  
しき品むある、悲しく細川家より物と寺し  
命と下しおの歳に深きまじりて結果  
坊に流るる文正の氏三つや文書や其  
他も研究する。●尾意の所ひあると感  
●北思りん  
一行の日程ありてん心依りてんまき唐津に  
赴く心きあるが依りてん一昨年大隈侯に  
つと行きて四より清在もし、今も再訪の心  
津に其處行くとてんを以ててんを行ん

東林堂

と志し一行の志本を以てし後單身志本を  
考し言柳も本條を福う更なる久保向とも唐津  
後福とんとするな進び為るいかなるうてん  
行くことと抱りて、双肩の何れありぬ支他無  
き旅の氣血ありてん此處に存すと自問自答  
し以がとん何れ長崎う行く氣あるうてん  
さうな唐津ありてんけん、形式的の送迎の  
煩しとてん流るる流るるの雨傘と思ひ判  
りてん、先年にも何れありてん、多分  
故味を覚く、●折角●約したる  
念、●折角●約したる、  
其体も皆く、●車中つづく長崎

く着込のききとまゝくしては、ちよとまゝに友人を  
おぼへてきたまゝ先方も煩ひすむらふからな  
お煩ひさんて印つて興味を殺むの、  
とまゝおぼへて、幼る氣の樂の旅、  
は、  
東の車、  
九州の、  
こら、  
を、  
て、  
と、  
とおろす、  
前年、

東林寫

あて、  
あ、  
狂、  
達、  
、  
常、  
料、  
こ、  
音、  
を、  
存、  
く、

や中葉(うまねこ)きくらげが道の七かしの  
の地を多く入んと厥のあふらぬ鹽(しほ)と  
いひえはしるししこを千ヤンボン煮  
と云ひ之れを瀾(らん)家(か)と千ヤンボン煮と云ふ  
七おし地(ち)の千ヤンボン煮と汁(じゆ)山(さん)の  
と汁(じゆ)と煮(に)るものとあり汁(じゆ)無(む)きものと千(せん)五(ご)  
入(い)れ出す也(なり)らん汁(じゆ)無(む)きこと可(か)  
す  
を海(かい)産(さん)物の一(いち)なる風(ふう)をいしと此(こ)のゆゑ  
のしるしと夕(ゆ)刻(こく)の舟(ふね)を舟(ふね)行(ぎやう)ふと  
うしと終(しゆう)は実(じつ)況(きやう)を記(し)す但(たゞ)し風(ふう)の形(かたち)  
状(じやう)を記(し)えたりを舟(ふね)記(き)のものとあふ

東(とう)橋(きょう)原(げん)製(せい)

所(ところ)あり海(かい)産(さん)物(ぶつ)純(じゆん)として一(いち)彩(さい)をもつと揚(たか)る  
大(おほ)き綿(わた)を考(こう)きたりと多(おほ)くはしるし旗(はた)  
をいふ海(かい)産(さん)物(ぶつ)と此(こ)の地(ち)を風(ふう)と云(い)ふ人も人(ひと)理(り)  
解(かい)せず海(かい)産(さん)物(ぶつ)と云(い)ふ  
七(しち)多(おほ)くはしるし海(かい)産(さん)物(ぶつ)と云(い)ふは此(こ)の地(ち)を記(し)す  
益(えき)敷(し)花(はな)提(てい)灯(とう)の形(かたち)を記(し)す人も人(ひと)理(り)  
此(こ)の地(ち)を記(し)す海(かい)産(さん)物(ぶつ)と云(い)ふは三(さん)葉(えふ)の  
二(に)葉(えふ)と云(い)ふと云(い)ふ  
板(いた)反(はん)平(へい)田(でん)しし電(でん)しゆ(じゆ)し海(かい)産(さん)物(ぶつ)の  
さうしんが一(いち)葉(えふ)と云(い)ふは前(まへ)葉(えふ)と云(い)ふは  
一(いち)葉(えふ)銅(どう)版(ばん)形(かたち)も書(か)きしを板(いた)を記(し)す人も人(ひと)理(り)  
海(かい)産(さん)物(ぶつ)の味(あじ)あると云(い)ふは此(こ)の地(ち)を記(し)す



ランプを其にせこがらす朱をいへるは  
世にそのおもむき異くして物も心算もさうい  
おルトと同好しと云うは其獨り人の不  
み：係り其人のふあに其ともうの扱ふ  
その人さういさういさういさういさうい  
油菜の更次柳行春にぬめさういさうい  
さういさういさういさういさういさうい  
さう

大段の筆をいへるは其の對支外交の  
ほどさういさういさういさういさうい  
そのうち段刊の毎をいへるは其の對支外交の  
大佛堂修繕のほど終らういさういさうい

東大寺

江戸の大寺をいへるは其の對支外交の  
さういさういさういさういさういさうい  
さういさういさういさういさういさうい

古例をいへるは其の對支外交の  
早くの例をいへるは其の對支外交の  
底にやとる、梅のうさういさういさうい  
どいさういさういさういさういさうい  
坪はあふさういさういさういさうい  
のほ安地平一と云うは其の對支外交の  
そののほ安地平一と云うは其の對支外交の  
早のほ安地平一と云うは其の對支外交の  
そのと得たさういさういさういさうい

し物より馬安外三四の枝をにねえと福打  
と来亭に到り候事一にめき中向付士も  
勝手と放逐し洋館に目およぶ

すし玄洋社関係の投反あり高田半峰社  
年一遊難の事と聞し海をよみけはあめ  
半峰と切りつける思と今も他をうと  
ふをゆきさぬ思をありあめを奉るに  
お尋ありし犯人を捕うることもあきなり  
し親ありを昔と不承り候くす政府の  
略に使喚せしとを推量しそししか今  
さげ候あめ後をあらり島上二頭山満を  
あしとせし者なきと記すあり玄洋社の

東洋社

着ものを詠飲のため情を漏らし候事  
さかるとさふまじしとて意あめのみとさ  
よめいふとさふまじしとて意あめのみとさ  
さうある事ゆす略の流宛にたらしく後  
考ありしとてさし編輯しとて余也  
此山と書きしとていふこととてさも記  
りありとてさし果つしとて固いんあうと  
て休見えと断るるべきこととて一笑す  
酒熟しと後候も花物ドンタリのみを  
るんし湖の玉を芽をふんを福玉  
満面の記し候事市氏に具く候事  
とてさふまじしとて一年の某月某日全河

休業して各戸に酒を飲ませるは、  
一と伝言に、飲食せしむるを、  
現に先日の如くあり、今市大いなる  
と語り、流しつるに、  
おかしきものあるは、  
川邊崎や茶屋の御祈事、  
そことまゝと玉角、  
こ捧げんとし、  
ろあるの牡丹、  
いりん、  
とまゝと、  
大尊、

目ゆるんか、  
社の名、  
女、  
行、  
つ、  
人、  
又、  
日、  
う、  
祈、  
お、

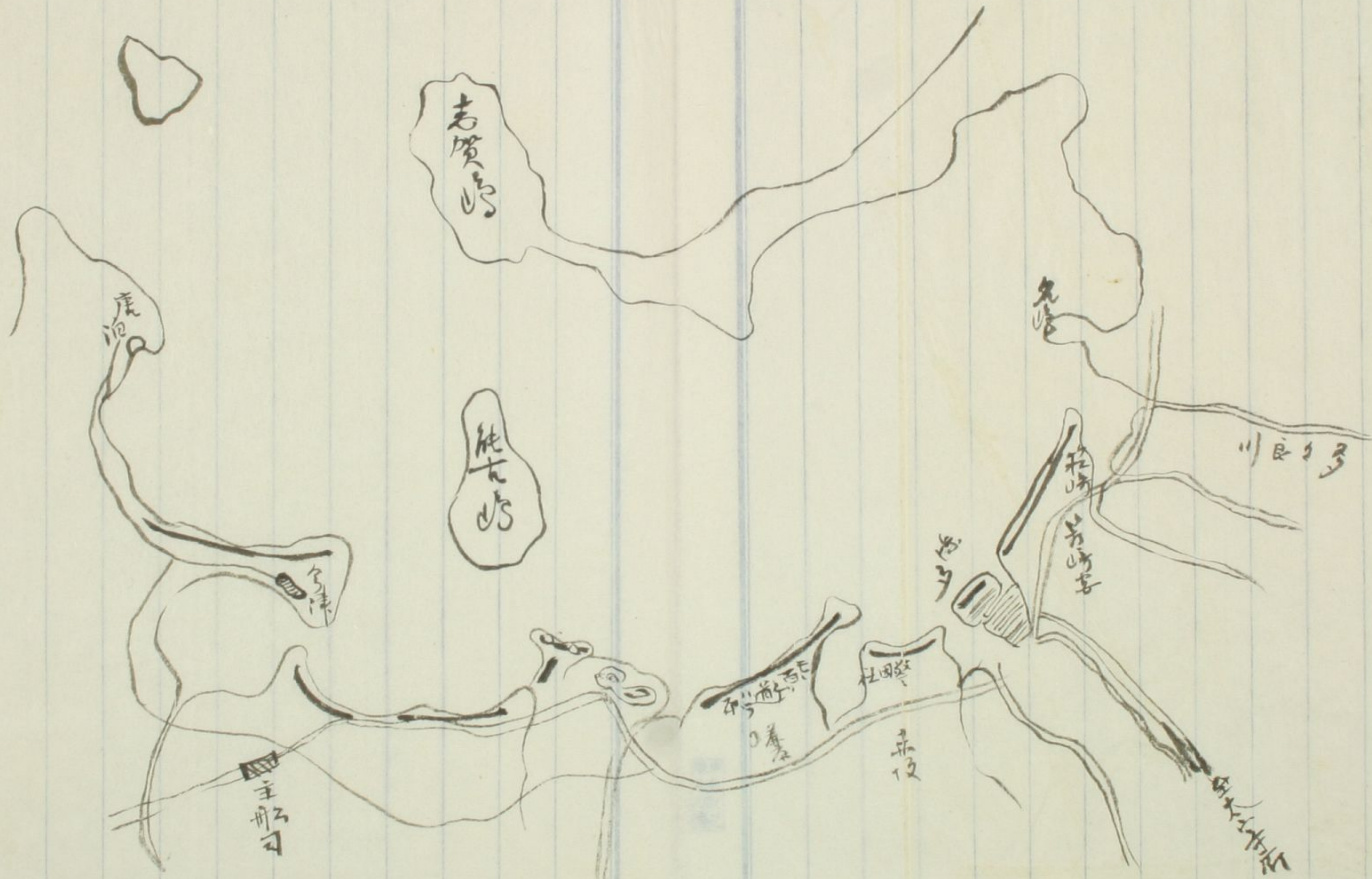


古の旅行をながす、思くはさるる日本史方  
 友邦に對し、完結る(陸)をながし、その望  
 風をながす、海(水)の口、陸(水)もなる年  
 前、元(水)敗(水)の語をながし、木下(元)元(水)史(水)  
 奇(水)の語、日(水)乘(水)の候と語、木下(元)元(水)史(水)  
 研究(水)者(水)冊(水)中(水)の(水)回(水)を(水)度(水)の(水)を(水)等(水)に(水)形(水)と(水)説(水)  
 一(水)と(水)を(水)な(水)が(水)う(水)ゆ(水)に(水)再(水)の(水)事(水)あ(水)る(水)志(水)妙(水)る(水)時(水)地(水)古  
 時(水)の(水)疑(水)う(水)ゆ(水)る(水)と(水)如(水)の(水)可(水)道(水)本(水)是(水)地(水)原(水)、(水)未  
 故(水)茅(水)の(水)地(水)を(水)自(水)動(水)車(水)一(水)地(水)回(水)に(水)磨(水)て(水)る(水)也(水)  
 今(水)世(水)に(水)自(水)動(水)車(水)一(水)と(水)故(水)後(水)一(水)り(水)と(水)る(水)文(水)の(水)後  
 一(水)と(水)故(水)を(水)な(水)る(水)一(水)日(水)中(水)故(水)一(水)と(水)解(水)一(水)と(水)探  
 候(水)を(水)な(水)る(水)と(水)ら(水)し(水)此(水)色(水)の(水)地(水)形(水)を(水)物(水)究(水)す(水)也(水)



故

こと(水)と(水)言(水)我(水)に(水)悔(水)ふ(水)べ(水)し(水)因(水)る(水)ゆ(水)に(水)地(水)を(水)ゆ(水)  
 ぐ(水)ること(水)今(水)の(水)軍(水)に(水)あ(水)る(水)の(水)故(水)に(水)地(水)を(水)ゆ(水)る(水)也(水)  
 東(水)海(水)軍(水)の(水)故(水)を(水)説(水)き(水)ゆ(水)る(水)也(水)軍(水)に(水)あ(水)る(水)故(水)に(水)  
 地(水)を(水)ゆ(水)る(水)也(水)又(水)水(水)の(水)後(水)を(水)な(水)る(水)也(水)今(水)に(水)ゆ(水)  
 無(水)い(水)し(水)ゆ(水)る(水)也(水)故(水)に(水)悔(水)ふ(水)べ(水)し(水)因(水)る(水)ゆ(水)に(水)地(水)を(水)ゆ(水)  
 が(水)る(水)也(水)一(水)と(水)故(水)を(水)な(水)る(水)也(水)一(水)と(水)解(水)一(水)と(水)探  
 候(水)を(水)な(水)る(水)と(水)ら(水)し(水)此(水)色(水)の(水)地(水)形(水)を(水)物(水)究(水)す(水)也(水)  
 防(水)壁(水)の(水)心(水)を(水)な(水)る(水)也(水)一(水)と(水)故(水)を(水)な(水)る(水)也(水)一(水)と(水)探  
 候(水)を(水)な(水)る(水)と(水)ら(水)し(水)此(水)色(水)の(水)地(水)形(水)を(水)物(水)究(水)す(水)也(水)  
 こと(水)地(水)回(水)に(水)つ(水)き(水)流(水)水(水)の(水)大(水)き(水)是(水)海(水)を(水)指(水)す(水)  
 事(水)を(水)ゆ(水)る(水)也(水)一(水)と(水)故(水)を(水)な(水)る(水)也(水)一(水)と(水)探  
 候(水)を(水)な(水)る(水)と(水)ら(水)し(水)此(水)色(水)の(水)地(水)形(水)を(水)物(水)究(水)す(水)也(水)





# 徳川侯一行の元寇史蹟視察

### 記念揮毫と訓話

熊本、佐賀兩市にて開催の全國圖書館大會臨席せる徳川頼朝侯の一行は五日福岡に來り松嶋屋に投宿し昨六日午前七時自動車三臺にて筑前糸島郡今津に赴き元寇防塁其他を視察したるが一行は徳川侯早稲田大學圖書館長市嶋謙吉慶應義塾圖書館長田中一貞、帝國圖書館司書淺見悦一郎、同文學士妹尾克巳南紀文庫司書橋井清五郎、同齋藤勇見彦、坪谷水哉の八氏外隨員今津史蹟保存會長木下謙太郎氏、三新聞社記者等にして自動車は今川橋より北筑軌道線を過ぎ今宿より高田を経て大迂回をなし八時過ぎ今津村に若し松隈村長牧岡校長外村有志一同は村役場に出迎ひをなし同村小學校職員生徒等同所に出迎ひの徳川侯は自動車より下車し村内有志に一場の挨拶をなし再び乗車勝福寺に赴き境内龍松下に於て新聞記者一同に對し侯は史蹟名勝天然記念物保存

協會々長として同會の内容發達に付詳細に記者等と名刺の交換をなし松隈村長同寺住職小田樓雲師に挨拶をなし松樹下にて記念撮影を試み直に徒歩長濱海岸に出で木下會長の先導にて同海岸の元寇遺跡にて去二年夏本社主催史蹟現地講演會にて發掘せる元寇防塁の實地視察をなし木下會長の最も詳密なる防禦の説明に次ぎ再び記念撮影をなし引返して萬人塚並に史蹟記念碑建設の基礎工事を見更に大泉坊に至り吾越五里の作なる國寶寶篋印塔天下第一品の稱ある僧榮西筆寫の字蘭盆經其他を觀覽し壇徒總代に國寶保存に對する希望を述べ記念揮毫として寶庫の二字を隷書にて大書し勝福寺に戻り境内にて小學校男女生徒に訓話を試み松隈村長は侯の來村を謝し終つて午餐を喫し其間同村酒造家笠富吉氏吟醸酒に元寇に因て「神風」命名したるが笠氏は曩に西園寺侯より「三笠」命名を受けたることもあれば頗る恐悅し同村より一行に元寇史蹟繪畫一組を贈り同寺を辭し徒歩今津渡頭に至り渡し船にて横濱に着き松隈村長以下村内有志の

見送りにて往途同様三臺の自動車にて同所を出發し歸途に就き北筑軌道線を東進し藤博電車線を辿り博多驛に至り木下會長、井手市長、田原商工課長、井上清助氏新聞記者等の見送を受け午後零時三十分同驛發列車歸京したるが侯は同日今津史蹟視察には非常の興味を感じ今津は實に「意南津」なりしと頌ふ満足したり因に市嶋謙吉、坪谷水哉兩氏一汽車遅れて別府入湯をなし歸京の筈なり

# 獨逸の化學工業



日六月五年四正大

獨逸の化學工業

獨逸の化學工業は、その高度な技術と多岐にわたる産業に、世界の先鋒として知られている。特に、染料、薬品、合成樹脂などの分野で、世界市場をリードしている。この産業の発展は、獨逸の科学者たちの革新的な発想と、高度な工業技術の結晶である。また、環境保護と持続可能な開発への取り組みも、獨逸の化學工業の重要な特徴となっている。

# 英在日日本救護班

英在日日本救護班は、大東亞戦争の激化に伴って、日本に在る英米市民の保護と救護を目的として組織された。この班は、主に大連、長春、青島などの都市に展開し、被災した市民の救助、食糧の供給、医療支援などの活動を行っている。また、戦時下の厳しい環境下で、市民の安全と生活の安定を確保するために、様々な支援策を講じている。



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45



泉州の愛娘當時を語る

本日除幕五十年祭執行

泉州の愛娘當時を語る 本日除幕五十年祭執行... 泉州の愛娘當時を語る... 泉州の愛娘當時を語る...

泉州の愛娘當時を語る... 泉州の愛娘當時を語る... 泉州の愛娘當時を語る...

泉州の愛娘當時を語る... 泉州の愛娘當時を語る... 泉州の愛娘當時を語る...

泉州の愛娘當時を語る... 泉州の愛娘當時を語る... 泉州の愛娘當時を語る...

傳路守泉和木眞

傳路守泉和木眞... 傳路守泉和木眞... 傳路守泉和木眞...

玄關から青繩持つた

玄關から青繩持つた... 玄關から青繩持つた... 玄關から青繩持つた...

玄關から青繩持つた... 玄關から青繩持つた... 玄關から青繩持つた...

玄關から青繩持つた... 玄關から青繩持つた... 玄關から青繩持つた...

玄關から青繩持つた... 玄關から青繩持つた... 玄關から青繩持つた...

玄關から青繩持つた... 玄關から青繩持つた... 玄關から青繩持つた...

最り探偵が同船する

最り探偵が同船する... 最り探偵が同船する... 最り探偵が同船する...

最り探偵が同船する... 最り探偵が同船する... 最り探偵が同船する...

最り探偵が同船する... 最り探偵が同船する... 最り探偵が同船する...

最り探偵が同船する... 最り探偵が同船する... 最り探偵が同船する...

最り探偵が同船する... 最り探偵が同船する... 最り探偵が同船する...

銅像建設の由來

銅像建設の由來... 銅像建設の由來... 銅像建設の由來...

銅像建設の由來... 銅像建設の由來... 銅像建設の由來...

銅像建設の由來... 銅像建設の由來... 銅像建設の由來...

銅像建設の由來... 銅像建設の由來... 銅像建設の由來...

銅像建設の由來... 銅像建設の由來... 銅像建設の由來...

和泉捕り實話

和泉捕り實話... 和泉捕り實話... 和泉捕り實話...

和泉捕り實話... 和泉捕り實話... 和泉捕り實話...

和泉捕り實話... 和泉捕り實話... 和泉捕り實話...

和泉捕り實話... 和泉捕り實話... 和泉捕り實話...

和泉捕り實話... 和泉捕り實話... 和泉捕り實話...

日本救護班

日本救護班... 日本救護班... 日本救護班...

日本救護班... 日本救護班... 日本救護班...

日本救護班... 日本救護班... 日本救護班...

日本救護班... 日本救護班... 日本救護班...

日本救護班... 日本救護班... 日本救護班...



阿彦旗山... 阿彦旗山... 阿彦旗山...

阿彦旗山... 阿彦旗山... 阿彦旗山...



俱楽部式のものに使用せんと欲するも、  
 のなり或は又事務の許す範囲内に於て  
 法村大正四年度歳入歳出決算を統合したる  
 主なる科目は歳入總計二十三萬五千八  
 百八十二圓にして内町村税十九萬六千  
 六十四圓にして其他は地租所得税の各  
 附加税及び縣郡補助金にして歳出總計  
 は二十三萬五千八百八十二圓にして内  
 役場費四萬八千四百六圓教育費八萬五  
 千二百三圓を主として其他は土木衛生  
 基本財産造成の各費なり

企救郡林業講話會 企救郡板橋村小  
 熊野にある同郡林業講話會は  
 豫報の如く四日午後零時半同郡林に  
 於て開會し伊藤郡林業技師は郡林經營  
 に關し鳴村本縣技師は同郡林の入手技  
 打間伐に關する實地的説明を與へて愛  
 林の思想を喚起すると、なり聽衆は郡  
 内の實地家及び林業者二百十八名并に  
 農學校及び小學校生徒約七百餘名にて  
 頗る盛會なりき尙ほ當日の來會者は何  
 れも斯業の熱心家多く郡林内へ分け入

り充分の觀察を爲すころなり觀望  
 を具するは妙なりし  
 福流の俊逸は皆此山内より出たもの  
 である、この聖一は四條帝の嘉禎元年  
 に入宋し「景福律院」や「天童山」「天竺  
 寺」等支那の禪刹を歴訪し、遂に徑山  
 の佛鑑禪師に參し、彼土でも普賢や子  
 曼等の英進の友もでき、足かけ七年間  
 滯宋の後、五月朔に支那の四明を發  
 したのが、我が四條天皇の仁治二年七  
 月なので、大宰府横岳に入つては恩師  
 佛鑑が歸せし、勅賜萬年崇福禪寺の  
 書を寺額に掛け、翌三年には博多承天  
 寺建てられて、茲に其開山山なり、太  
 宰府觀世音寺の伽藍のいたづらが思は  
 ず相國藤原道家と相見する不思議な因  
 縁と爲り、前記慧日山東福寺の大伽藍  
 初められて其開山と爲り、後嵯峨後深  
 草の御代を經て元寇の序幕隱使の來往  
 より、文永の來襲を過ぎ遂に弘安三年  
 に入寂したのである、彼土の語韻や

見送りにて往途同様に三臺の自動車にて  
 高麗を征せん迄計劃した程、我  
 風土人情に精通して居たことは、福岡  
 敵狀を偵察するのは、決して不思議  
 な現象では無、それ故元寇當時の通  
 譯官であつた宗教家もこれと同じ働き  
 をしたもので、暗雲を鎖し外患の  
 報頻頻として來りつつある元寇襲來前  
 に幾多の宗教家が飄然錫杖を杖ついで支  
 那に渡つたのは、決して怪しむに足ら  
 ないのである、彼等が一片の情報は國  
 家の爲に幾國の兵を動かすより以上  
 重大であつた、此裏面の消息が有つた  
 ので、前掲の第一懸案の示せる如く歸  
 朝の宗教家は上陸直に外交軍事の策源  
 地鎌倉に赴いて敵國の情を報じ更に第  
 二懸案の示せる如く幕府は努めて歸化  
 僧により敵國の事情を探知し、第三懸  
 案の示せる如く戰機日晷に迫りつ、あ  
 れども重大な任務を帯べる圓頂緇衣の  
 渡航者は絶わなかつたのと思惟される  
 此宗教家の入宋の結果は何處であつた  
 か、建治二年三月を以て我より先んじ

事務室の人



秘關に居つた頃房州沿岸でタコ  
 に轉勤の地命を受けた其際も新  
 ソタの沈没を聞いた時事情も似て  
 氣遣ひました「三語る間にもサッ  
 の勢ひで沈没し出つ入りつる官  
 たり秩序井然たるものである

一見唯女と云ふと云ふ一見終るも美人塚に  
 及び更なる此の記念碑と建てるん  
 地をたし地をたすをたすは  
 此の地をたすをたすは  
 塔を、抑あやの獨りの捕書をも地を  
 りに供役しるこころなる人  
 後しめりやくる地をたすは  
 記念の地をたすをたすは  
 こころなる人  
 とをたすは得たりし地所は、表干の美を  
 日と津下、夏族の若菜干あり其の姓を  
 たりしと云ふは、





灘より地形よりなるものなり  
の谷より橋なるものなり  
と地形の便をみるものなり  
内地の谷をみるものなり  
：往年よりなるものなり  
昔より世界浴場の相をみるものなり  
街の開きけるものなり  
：軌よりなるものなり  
公園よりなるものなり  
区域よりなるものなり  
：画よりなるものなり  
西三年のありたるものなり

島より皇朝の形を道し見るものなり  
が志よりなるものなり  
二アよりなるものなり  
：馳よりなるものなり  
車よりなるものなり  
：行よりなるものなり  
府よりなるものなり  
支けは海に就くものなり  
：温よりなるものなり  
：北よりなるものなり  
行けば山下に池よりなるものなり









予亦これ思ふべくんばん歎

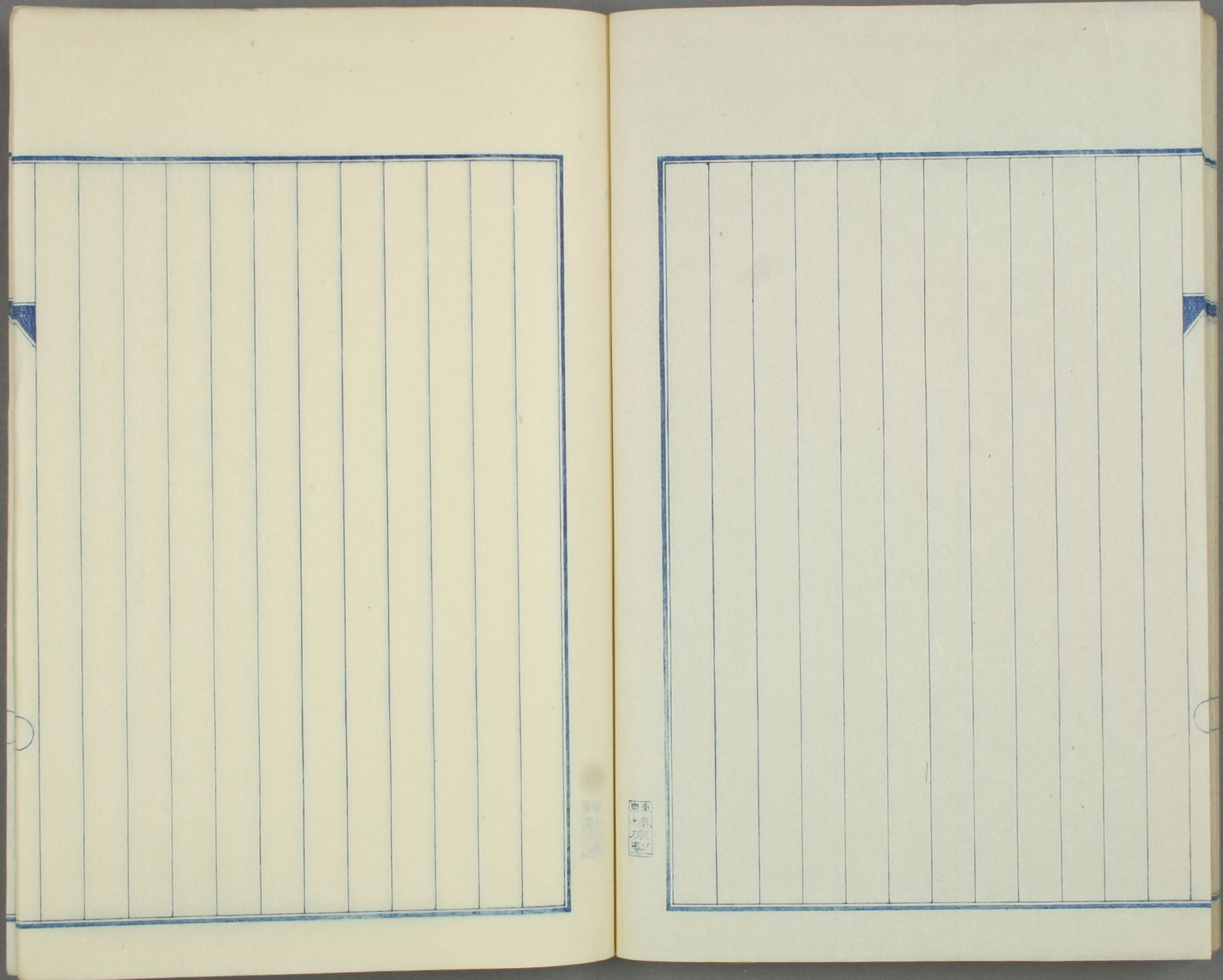
別府一とを由りて津に一を遣はせと成て安ん  
と云くはる何れも見る物の言はるも海は津  
不測の言はるぬる言はる言はるぬるの言はる  
ハ唯此一端をある言はる言はる言はる言はる  
津在りぬる海地獄を言はる言はる言はる言はる  
と云ぬく言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
歎市ヤカ一と云ぬる言はる言はる言はる言はる  
と云ぬる言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
と云ぬる言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
と云ぬる言はる言はる言はる言はる言はる言はる

別府一とを由りて津に一を遣はせと成て安ん

と云ぬる言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
リと云く言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
津船と云ぬる言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
海上に於て平穩を言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
貴人等と云ぬる言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
と云ぬる言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
見ると言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
也也言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
言はる言はる言はる言はる言はる言はる

八日午後船は弟直と云ぬる言はる言はる言はる言はる言はる言はる  
車の手をこぬく

終



東  
洋  
製

以下  
3 丁  
白紙









繪になつて今も明かに拜まれる  
最初の再興は鑄造より百餘年の後  
二年五月二十三日、鑄造の像がだ  
んだんに傾いて御首が自ら地に落ち  
たので、同年六月七日参議四位上藤  
原朝臣氏家を勅使して佛頭のやうな  
見せしめられた上、やがて貞觀二年四  
月八日眞如法親王を修理大佛檢校とな  
され、修理成就して貞觀三年三月十四  
日開眼供養を行つた  
その後承和四年十二月二十八日、三  
位中將平重衡の兵火に罹り  
さしもの大佛も烏有  
に歸して空しくなつた

この時醍醐那佛の御頭を左の御手こ  
が銜け落ち、脇侍の四天王も刺繍の曼  
荼羅二鋪が共に烏有に歸した、この時  
には朝廷より左少辨藤原行隆を造司  
長官としこれを修造させる事とした  
が、なか／＼容易の事でない、その當  
時醍醐寺に俊乘坊重源と云ふ大徳が居  
た、嘗て入宋して經論を修め、朝辭し  
て四衆の信仰を一身に集めて居た、こ  
の重源一日行隆を訪ねて、大佛修造必  
成の策を進めた、こゝにおいて行隆は  
執奏し、主上はやがて重源に官旨を賜  
ひて勅進進まされた

重源はこゝにおいてその成功を期し  
一條の杖に一盞の笠を戴き連の實の柄  
杓を携へ、西は九州より東は奥羽に至  
る千里の山川を跨り、十方に浮財  
の喜捨を求め、こゝ二年漸くその  
費用を得た、けれどもこの修造をなし  
たすべき技術のものが、比我が邦  
に乏しき事を知り、重源はこれに  
來て居ることを知り、重源はこれに  
相談して、陳和卿及び同人の、陳佛  
壽以下宋朝工七人日本備物師工十四人  
と共に養和五年に工を起し、十四度も  
鑄直して壽永二年六月に竣功した、爾  
うして文治元年の八月二十七日

つた、こゝろで黄金があつても水銀が  
無くては佛身を成すことが出来ぬ、陳和  
卿も重源上人もこれはハタシ當惑し  
た、折から伊勢國の住人大中臣の某  
から水銀二萬兩を法皇に獻上しその中  
の一萬兩を大佛に下されたので、漸く  
元の如く大佛の工事は成されたのである  
この水銀は大中臣家の舊宅址から發掘  
したもので、聖武天皇の御宇に陸奥國  
から黄金を獻つたのと同じやうな話  
として傳へられて居る  
その後に小修繕はあつたに相違な  
いが記録が無い、治承より三百年の後  
永祿十年十月十日  
三好松永の兵火に罹つ  
て大佛殿は又も炎上  
した、この時にも大佛の御頭が墜落し  
た、けれどもこれを接ぎべき高工がな  
い、當時京都僧で清上人と云ふのがあ  
つた、この人勅進聖人なり、大和國山  
邊郡福住の人山田民部少輔宗重入道遺  
安が傳學で諸藝に堪能であつたので、  
自ら本願となり、佛體は舊の如く成就  
したが殿宇を造營するまでに至らず大  
佛は徒らに雨露に曝されて居た、この  
間百四十餘年

貞享元年になつて、東大寺僧松院に  
公慶上人と云ふ大徳があつた、東大寺  
大聖院英法印の弟子で、大佛の尊像  
が草運々たる中に露坐して居るのを見  
て再興の志を起し、勸許を蒙り幕府  
に請うて大勸進の許可を受け、重源の  
携へた運の實の勸進杓を撰進し、日  
本六十餘州を遍歴して淨財を募つた  
本六の當時の事である

大佛の商賣家が三  
三百斤を寄附した

がその大きさが瓜はさの物で三千箇あ  
つた、人々が相談して船で送らうか車  
に仕やうか云つた、公慶直に筆を執  
つて大佛殿所用の銅を畫いて、悉く路  
傍に捨て、通行の人が各携へて  
東大寺に送り、七日の後にはその數が  
悉く備つた云ふ、その時代の人の  
正直であつたことはこれで判る

元祿元年四月二日から八日にか  
けて、衆僧千人、工匠五百人を招き、大佛  
造營の盛儀を擧行した、勸修寺宮二品  
清深法親王が導師となつて盛んなこと  
であつた、この年八月公慶に上人號の  
勸許を賜ひ、二年二月二十三日に院內  
に天王殿を構へて聖武天皇の尊像を安  
置し、三年に大阪町奉行所の許可を得  
て南島に材木置場を設けた、後世

こんな風に工事はやりかけたが費用  
の金が足りない、元祿五年の三月八日  
佛像の修理成り、開眼供養會を行つた  
もの、なか／＼殿堂を造營するに  
なれぬ、時の將軍徳川綱吉公、生母桂昌  
院等に大にこの勸進に力を盡し、同七年  
の九月諸國勸進の便宜を與へ、人別奉  
加を許し、十二年には諸國に命じて封  
祿一萬石に一萬石、以下これに準する  
金額を寄附させ、奈良奉行木下彦右衛  
門賴保をして大佛殿再興の總監督とし  
た、これが勸進で諸國勸進の總監督とし  
た、その祖先が源賴朝公である云ふ  
ので大に力を添へその領内から大木を  
寄進する、防長一州の大守毛利侯から  
は多數の秋燒の大木を寄附する、大  
佛殿の礎石を寄附して、後世茶室の礎石  
もこの礎石である、その他の諸大名  
も家旗本の内々何れもその再興に力を  
盡したので、公慶上人はこの工事中に  
遷化した

法興公の代になつ  
て花々しく大佛供養

を行ふた、寶永五年六月二十六日のこ  
こである、かくて大佛殿は漸く舊觀  
に復したが、尊像に金箔はこの時も採  
すことが出来なかつたのであるその元  
祿興隆の再興になつた堂は  
東西三十八間六尺二寸、南北二十五  
間四尺三寸、高二尺四寸餘、柱數六十  
本、石壇上東西三十四間二尺五寸、南  
北三十五間、高さ五尺

明治になり大佛殿を修繕したのは大  
佛會である、大佛會の萌芽は明治十四  
年四月二十八日の事である、大佛に  
は大佛守護の歡喜天がある、その  
當時の東大寺別當坂坂善海僧正は大坂  
高津表門自性院の藤村留正僧正を請ひ  
て浴油供を修せしめた

この歡喜天は大佛守護の肩を通り、  
大佛興隆の外、何事を願うても御利益  
がなかり、却つて罰が當つて煙になつた  
り、または頭が腐つたりする云ふ恐  
ろしい靈驗、元祿興隆の時にも公慶上  
人が拜まれたことであつた、この度は留正  
僧正に浴油供を修せしめた、歡喜天を  
待遇すに浴油程の御馳走はない  
留正僧正は即ち以前東照權現の御廟  
(御朱印地)は何處にてもあるであつ  
た天王殿へ歡喜天を勸請し、沐浴靈戒  
一心不乱に御利益を祈つたが何んの御  
利益もなく却つて喧嘩がおつ初まつた  
それはその頃奈良の植村久通、平松  
甚平等の諸氏が奈良興隆社云ふを起  
し、奈良市全部を公團とし、東大寺を  
も公團の中に編入し興隆社で大佛の大  
佛會を行つたやうな事あり、興隆社  
務省に向け、大佛の事を東大寺に任せ

ておくから、何時までも修繕が出来ん  
のだ  
南大門の如き既に足  
場を組んで六十年

何んのなすこもなく雨風に曝して、  
足場の杭も朽つて居る、東大寺の力に  
は及ばぬ相談、興隆社に任ありたし  
は願ひ出た、東大寺では坂坂別當一  
期の事業、藤村留正僧正を請ひ歡喜天  
浴油供を行ひ、菅沼英樹、佐保山晉園  
等の諸師と共に東大寺の力で修繕を仕  
やうに彼方此方に勸請し、堺縣へも願  
ひ出て居た當時であつたから、忽ち興  
隆社と東大寺とが衝突した

この頃米國人グラント氏云ふが日  
本觀光の途奈良を過ぎ、やがて東京に  
至り、大佛のやうな千有餘年の歴史を  
有する古佛が、若し我が米國にでも  
入つて來るに當てぬやうに仕ておかう  
ものを云つた、こゝで内務省でも捨て  
おく理由に行かなくなり、當時の堺縣  
令後所篤氏に大佛修繕の事を沙汰した  
ので、南大門は其筋の費用で忽ち修繕  
が出来

東大寺と興隆社との喧  
嘩は如何なものであつたか

こゝにおいて東大寺と興隆社とは大  
佛修繕の事を一致して行はうと相談  
し、村久通、平松甚平等はこれが役  
員となり、坂坂留正僧正を大將として、  
佛會の事を一致して行はうと相談し、  
江戶町に住んで居る宮崎幹氏であつ  
た、工費は八萬圓と云ふ、こゝで宮崎氏  
は陸になり陸になり大にこの事に力を  
盡した

明治十五年十月十日、内務省の許可  
を得、同時に下賜金を得やうと云ふの  
で坂坂留正は藤村留正と東京に行き、  
十二月二十二日奈良に歸つた、この時  
内務省から二百圓の金を貰つて來た、  
これに大に力を得て翌年十月初めて大  
佛會を組織し、大阪南區坂坂法祐寺即  
ち坂町の天神に支局をおき、留正僧正  
が支局長となり、大阪の市郡を勸許す  
る事となり、十六年七月七日の運動  
で略その計畫も成つたが、いよいよ勸  
許云ふ段になつて、十八年は大洪  
水、十九年は悪疫流行で、この事が丸  
潰れに潰れて了つた

東大寺大佛會からは幾度も大阪府に  
勸許募集の事を進めたが、足許に大阪  
府民の棄放の苦を見ながら、大佛さま

まで手が廻らうと云つて取り合はず  
兎角するほかに、奈良縣の設置となり  
は大佛會と大阪府と  
は縁切れになつた

こゝにおいて、大佛會は奈良縣廳へ  
大佛修繕の事を願ひ出た、縣令もな  
る程さうなつき、監務課長平田好氏に  
この事を命じた、平田氏は兎も角も造  
れし云ふので、千何百圓と云ふ金をか  
けて先づ足場を造つたが、金が足らぬ  
ので工事にかゝらずこの足場は遂に空  
しく朽つて了つた

大佛會はその後引き續き大佛の興  
隆に力を盡したが思ふに任せぬ、さ  
ら明治二十三年に坂坂善海は遷化し  
菅沼英樹僧正の後を襲ふたが間もな  
く戸田英徳師の代になつた、その頃か  
ら國費や特別保護建造物の事につき、  
東京から木下實博士、伊東忠博士士  
等が奈良に出張し、諸建築物を取調べ  
たが、三十一年十二月

大佛殿は特別保護建  
造物に列せられた

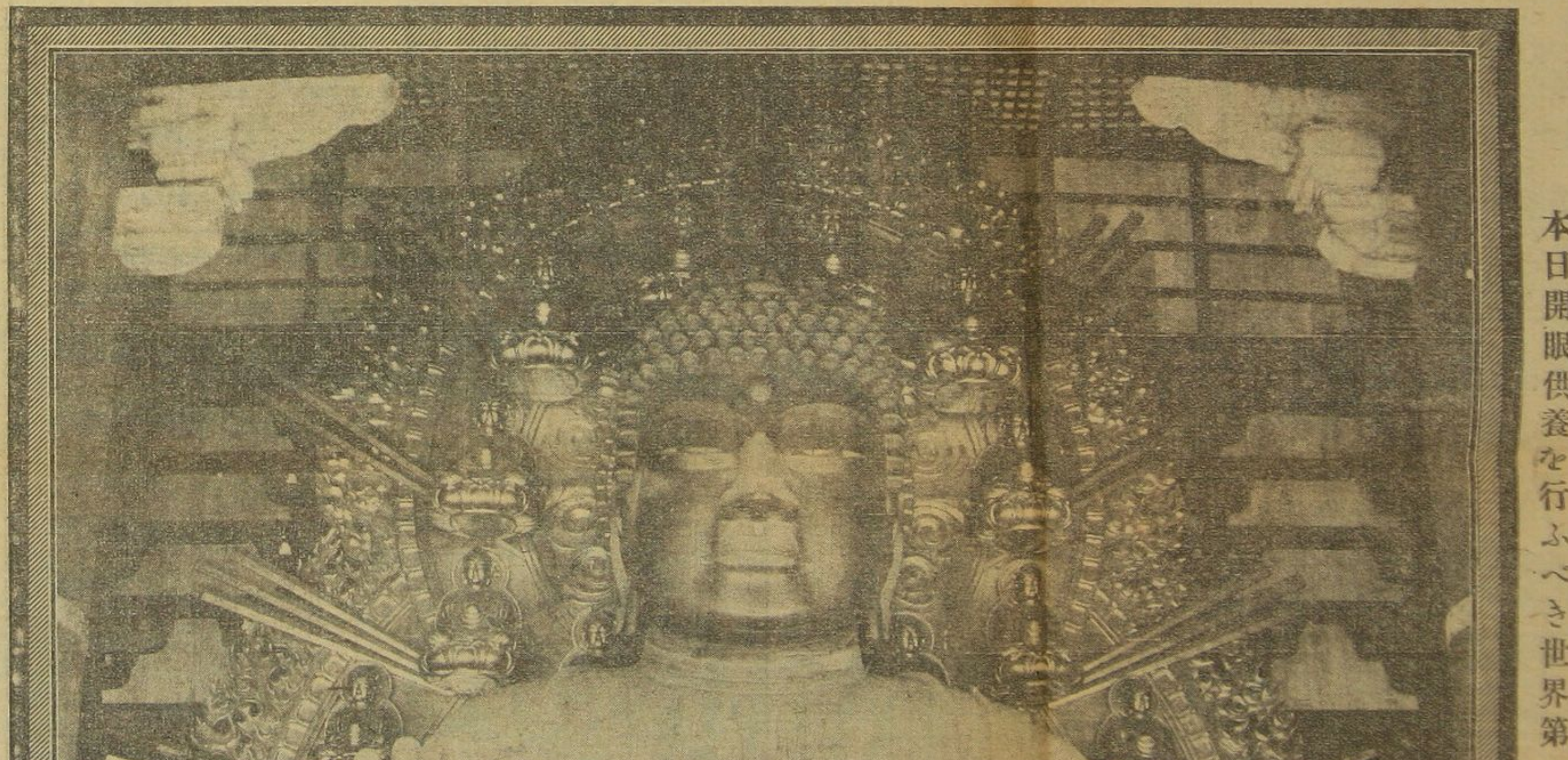
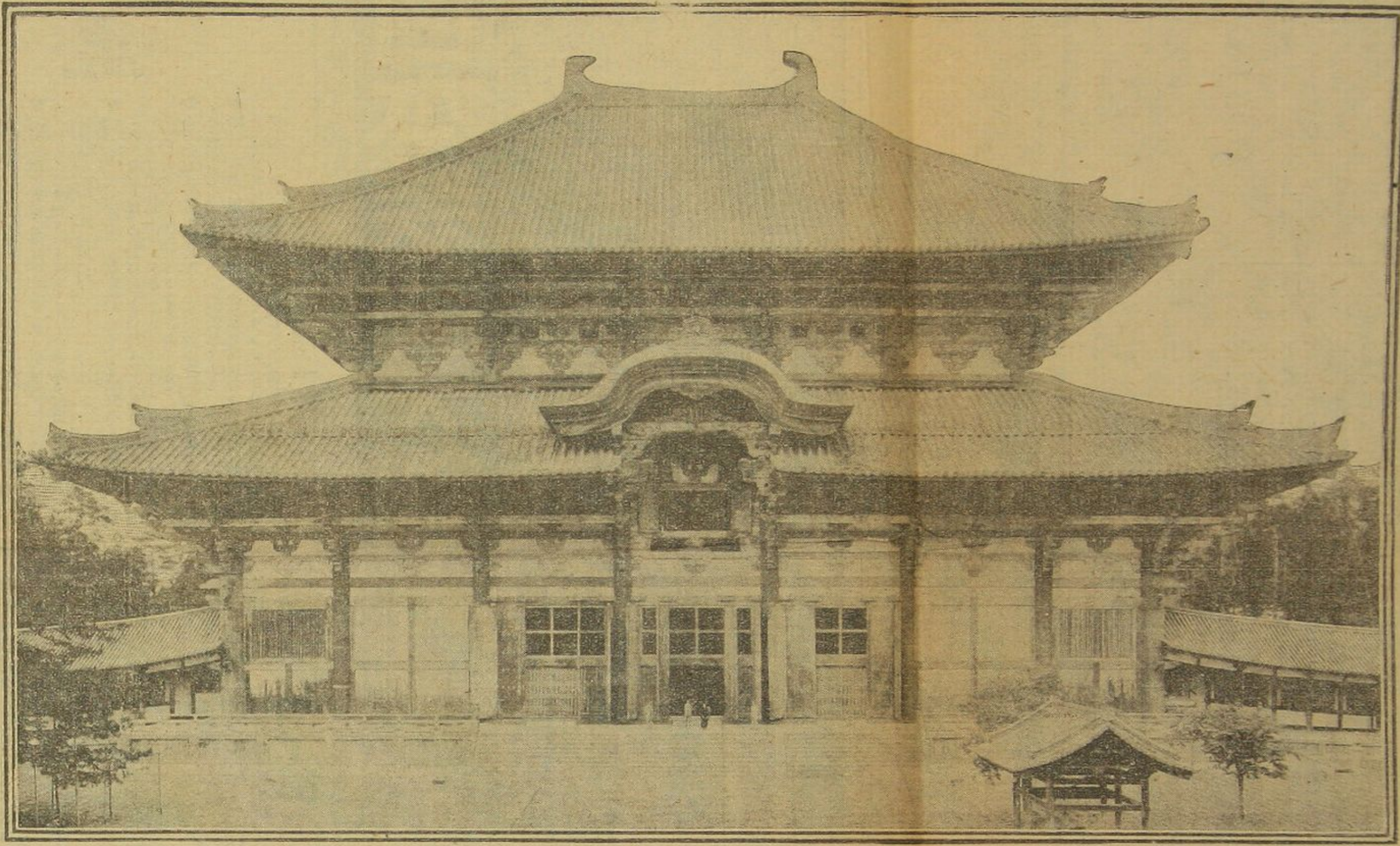
その翌三十二年八月十七日、妻木伊東  
兩博士は再び奈良に出張した、即ち大  
佛修繕の爲で、殊に妻木博士は元祿  
興隆の別當町奉行で、大佛修繕の奉  
行を承はつた彦右衛門賴保の子孫と  
云ふので、入のこ事を盡した、その  
結果工費四十六萬九千六百圓と三十八  
萬八千圓の内三十三萬五千圓を政府より  
補助して貰ひ、あゝを東大寺で勸進す  
る事したがなかなか寄附が集まらぬ  
さる程に三十二年戸田僧正が遷化し  
佐保山晉園師が新管長に補せられ、三  
十六年四月妻木實博士、木下清敬の兩氏  
が大佛修繕の顧問となり、内務省の關  
野博士が設計し奈良縣の鑄造技術が重  
にその衝に當つて、四十一年には工費  
六十八萬七千二百二十一圓で進る事と  
なつた、けれども同年物價騰貴の爲成  
工の券銀が高くなつたので、これが七  
十一萬四千四百五十一圓と云ふ事とな  
つたが、此年政府より更に四回に十五  
萬圓都合四十八萬五千圓を貰ふ事とな  
り、こゝに工事は着々進捗し、昨年落慶  
供養を行ふ事となつたが該年の爲今日  
に延びたのである

木材は紀伊、大和、土佐等から買ひ出  
したものでそれは二十餘萬圓、釘や鐵  
に使ふた鐵が九萬六千圓、銅が二千五  
百圓、鉛が千五百圓、瓦が一萬三千圓、  
これに寄附の分を加へたら五萬四千圓  
五萬四千圓はかゝつて居らうとの事  
で工費が十七萬三千餘圓であつた

本日開眼供養を行ふべき世界第一の最大木造建築奈良東大寺大佛殿の大佛像

（完）





本日開眼供養を行ふべき世界第一

### 大佛殿修繕と最新科學の力

東京帝國大學工科大員教授 工學博士 伊東 忠太氏談

現在の奈良大佛殿は元祿年間（一六九〇）の再建。實は第三回目に係り爾來風雨實に二百有餘年の星霜を経過して明治初年頃に至りてはさしもの大伽藍も軒は波の如く挽み柱は弓の如く曲り敗壞其の極に達したので朝野共に早晩根本的大修繕を施すの急務なるを感じて居たのであるけれども何分

**非常な大事業** なる爲に容易に着手するの運びには至らなかつた然るに明治二十五年頃なりしに記憶するが、修繕を断行することになり足場なども建て、工事を開始し種々研究して見ることも一通りならぬ巨額の費用を要する云々の折角の計畫も遂に行儀みの姿になつた其の後古社寺保存會が設立されるに至り同會に於て大佛殿を特別保護建造物の資格あるものと認定され次で同殿は

**我國第一の名物** として是非とも之が保存を計り根本的に修繕を行はなければならぬと云ふ決議を爲し大佛殿の修繕に於て、愈々其の緒に就き技術上土木建築博士並に故木子清敬の兩氏を顧問として實地設計は最初土屋工學士に當り次で奈良縣技師の加藤谷、天沼の兩工學士之が具體的の計畫を樹て、専ら現壇主任として又政府側にては内務技師の關野貞博士之に參與して工事を進行することとなつたのであるが工費は最初の概算よりも追追に嵩んで約七十萬圓の巨額に上り其の約三分の二は政府に於て補助し餘額

は東大寺の資財及び一般篤志家の寄附に依つて之を補助し去る明治三十六年（一九〇三）に於ては十年の星霜を閲して此程首尾よく竣工を告ぐるに至りて此修繕事業であつた、依此の修繕工事は通常古社寺の修繕工事は根本的に異つた考へをしなければならぬ其は通常の古社寺修繕ならば主として古式を保存するの方針で行つて行けるのであるが是に反して大佛殿の修繕はそれだけに不可なものであつて此は構造上に重きを置く必要が伴つて来た云々ののは元祿の再建工事なるものは今日の科學的建築術から見るに非常に不完全極まるものであつた、元來

**大佛殿の重量** は常識を以てしては殆ど想像の出来ぬ程であるので此の舊建築は到底之に堪へられ得ざる粗末なものであつた、其の結果今回大佛殿を爲すに於り **現代最新科學の知識** を能ふる限り利用して構造上實に修繕たる工夫を加へなければならぬことになつた、例を擧げるに在來の柱は其の空中に心柱を置いて周圍に皮を宛て、包んだもので重量は案外薄弱なものであつたのを今度新に鐵材を入れて

**事實上鐵柱** として了つた、尤も周圍には木を被せてあるから

外觀は普通の木柱に少しも異らぬけれども其の實鐵柱の役目を勤めさせて居る又屋根の檼は柱の外へ五間以上も飛び出して居るが其の檼を支へる爲に從來は不完全な構造に於て木材を用ひて居たものを今回は隨所に鐵材を使用し其の耐荷力を助けることにした次に **小屋組** の如きも全然其の組織を變更して鐵材を適所に使用することにした今最も注意すべき點である而も此の如く最新科學の力に依りて其の構造を改めたりし雖も一面に於ては飽くまで

**古代の形式手法** を保存して依然舊態を變せぬやうにした。當事者として實に容易ならぬ苦心の存する所である。

ソコで此の大佛殿が、愈々竣工して見るに對して一般の人々には種々の批評がある様子で中には「成程大佛殿は立派になることはなつたが一體何所に七十萬圓なぞ、云ふ大金が要つたのか唯ひかりになつた柱が眞直になり又腕んだ檼が張つた云々迄のこゝではなにか」云々て修む向もあるのであるがソコが即ち當事者として苦心の存する所なので **巧妙なる修繕** には聊か修繕の痕跡を残さない云々、

**絶大な價值** が籠つて居るものであつて此の大佛殿の大修繕は大概に於て吾々は誠に美事に出来上つた。

### 金色の鴟尾が載せられた

の金色の鴟尾が載せられたので之に就ても往々「さうも如何にもクバクバしくて不可ぬ」云々批評もあるやうであるけれども是れも自分分は一向に構はぬと思ふ元來此の大佛殿の屋根は様式上さうしても鴟尾がなければ調和しないので創立當時、聖武天皇の御代、大佛殿には鴟尾が載つて居たのを喪失後の再建に際して之を欠いたものであるから今回の大修繕を機会に鴟尾を補ひ附して古式に復せしめた云々ののは最も宜しきを得たものであると自分は考へるのである、更に日本に於ける否に世界に於ける最大の木造建築なる此の大佛殿に對して根本的に

**外科的治療** を施して無事美事に完成せしめたる當事者の苦心並に其技術及び之が監督指導の宜しきを得たる政府當局者の熱心は共に今回の大修繕に就て

の殊勳として永く後世に傳へなければならぬ次第であつて吾々が此の建築に依り略々鎌倉時代源頼朝の再建せる東大寺大佛殿の佛を彷彿することを得るの同時に更に進んで、

**天平創立當時の大佛殿** を追復することを得る云々云々は歴史家技術家としては勿論一般國民にして無限の歡興を催す所以である。

終に附言すれば聖武天皇御創建、即ち天平時の——東大寺大佛殿の様式は

支那唐代の建築に則つたことは勿論であるけれども併し其の規模より云へば唐代の建築よりも遙に大規模のものであつて聖武天皇が最初より

**三國一の大伽藍** を建立しやうとの御意慮であらせられたこと言ひ傳へられて居るが儘に事實である唐代の建築に關しては今日其の遺物が殘存して居ないから確言することは出来なから由來支那時代の建築は即ち唐の復興も見るべきもので非常の大建築物が——支那にしての——經營されて居る而して唐時代に於ける **支那最大の建築物** として今日殘存して居るものは北京城内の **大和殿**——我國の大佛殿に相當する——であつて是が一番大きい、その様式は大佛殿と同じく二重屋根の四阿造りで棟上には鴟尾が載つて居る、之は天平創立の大佛殿に比較すれば其の

**面積は二分の一** に過ぎず而も之が支那全土を通じて **第一の建築** なのであるから實際此の奈良の大佛殿は儘に支那に其の比倫を見ない而して古來支那以外には木造建築は發達しなかつたので今の大佛殿は天平時代當時のものに較べるに僅に其の **六割に相當するに過ぎない** けれども尚且 **世界第一の木造大建築物** 云々云々が出来るは是れ實に **日本の誇り** であるといふことが出来る。



支那唐代の建築に開つたことは勿論であるけれども併し其の規模より云へば唐代の建築よりも遙に大規模のものであつて聖武天皇が最初より

▲三國一の大伽藍 建立しやうの御願慮であらせられたことも言ひ傳へられて居るが儘に事實である

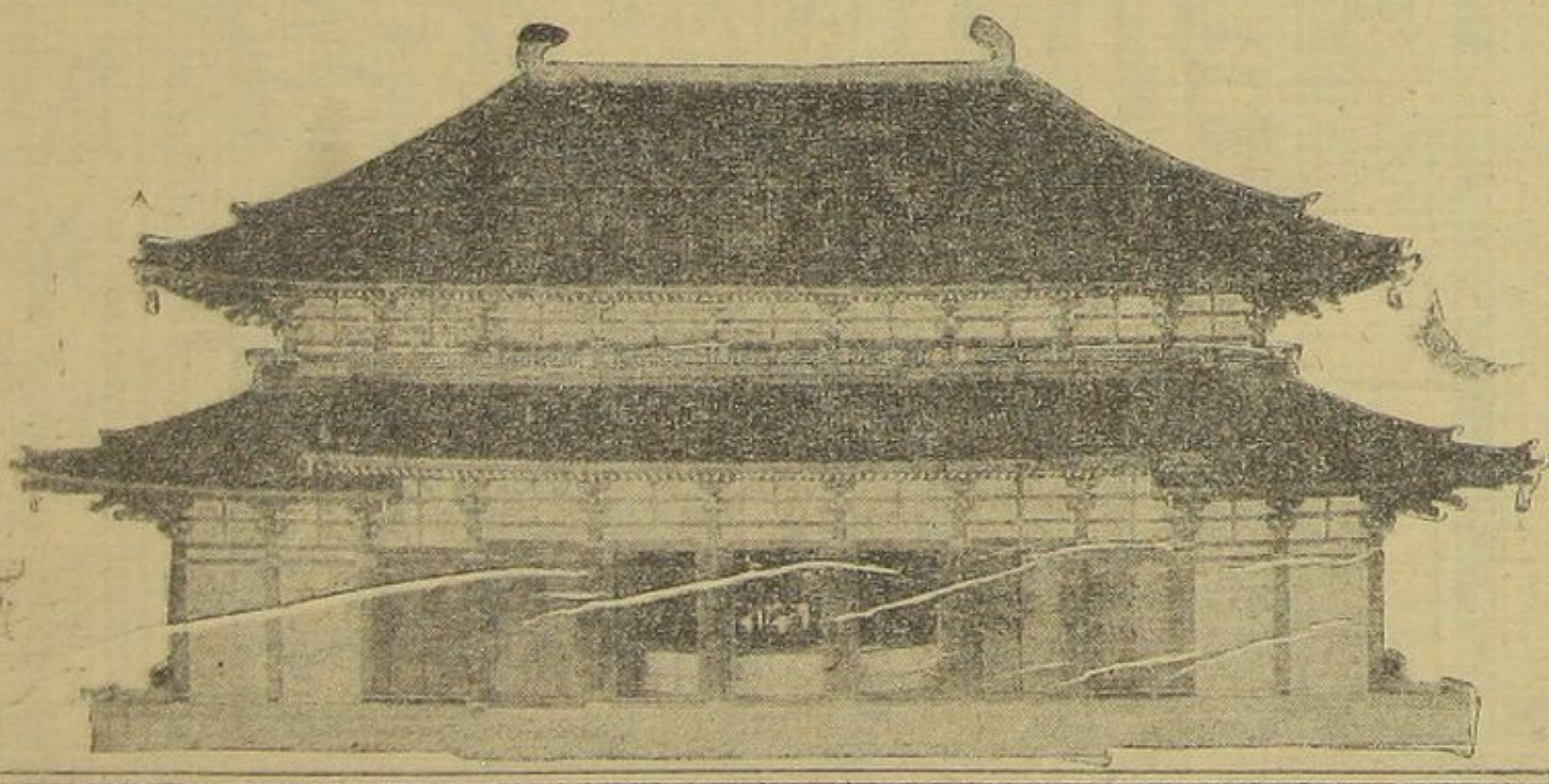
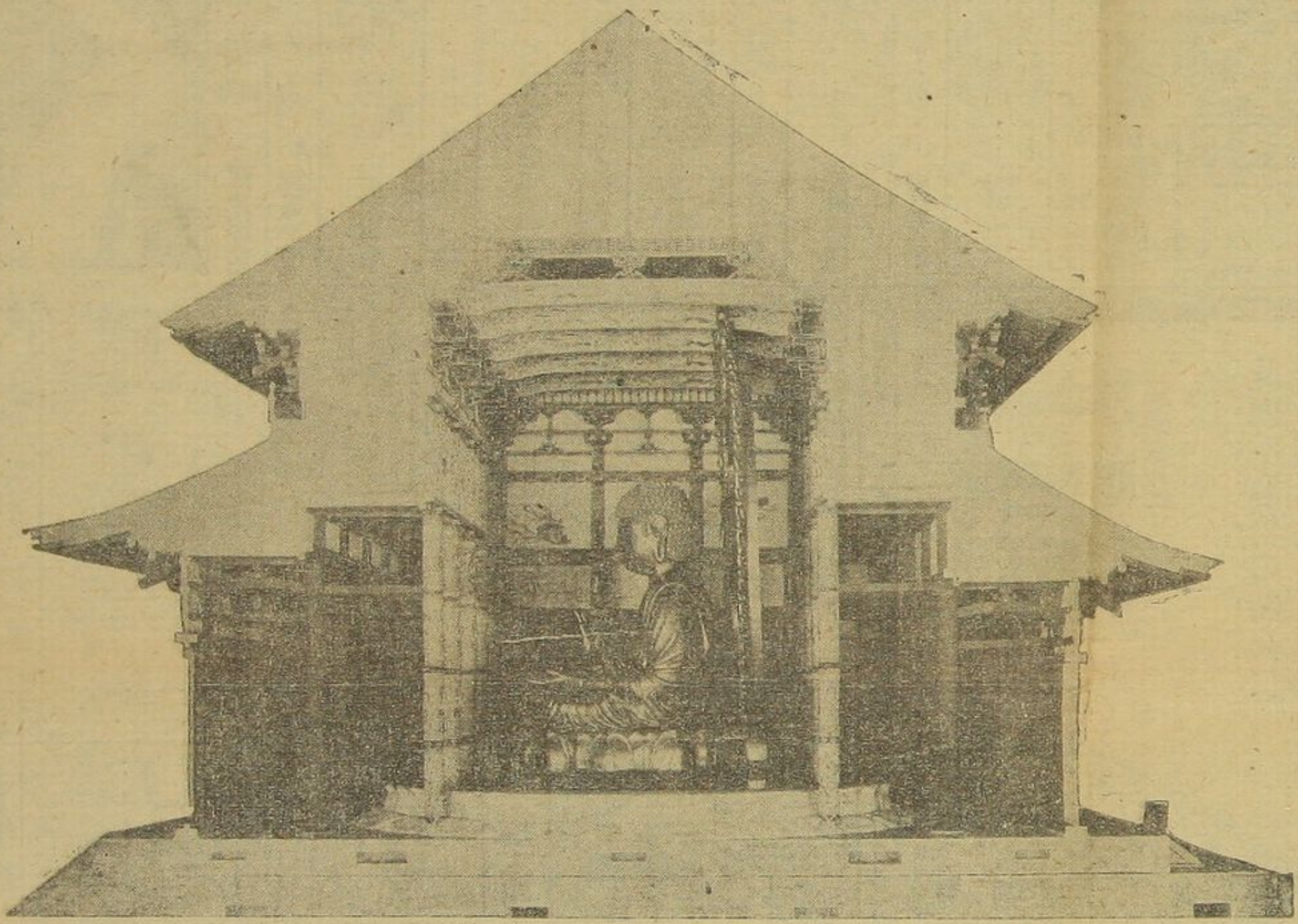
唐代の建築に關しては今日其の遺物が残存して居ないから確言することは出来な

最大の建築物として今日残存して居るものは北京城内の大和殿

殿——我國の大極殿に相當するものであつて是が一番大きい、その様式は大佛殿と同じく三重屋根の四阿造りで棟上には鸞尾が載つて居る、之は天平

▲面積は二分の一に過ぎず而も之が支那全土を通じて第一の建築なのであるから實際此の奈良の大佛殿は儘に支那に其の比倫を見ない

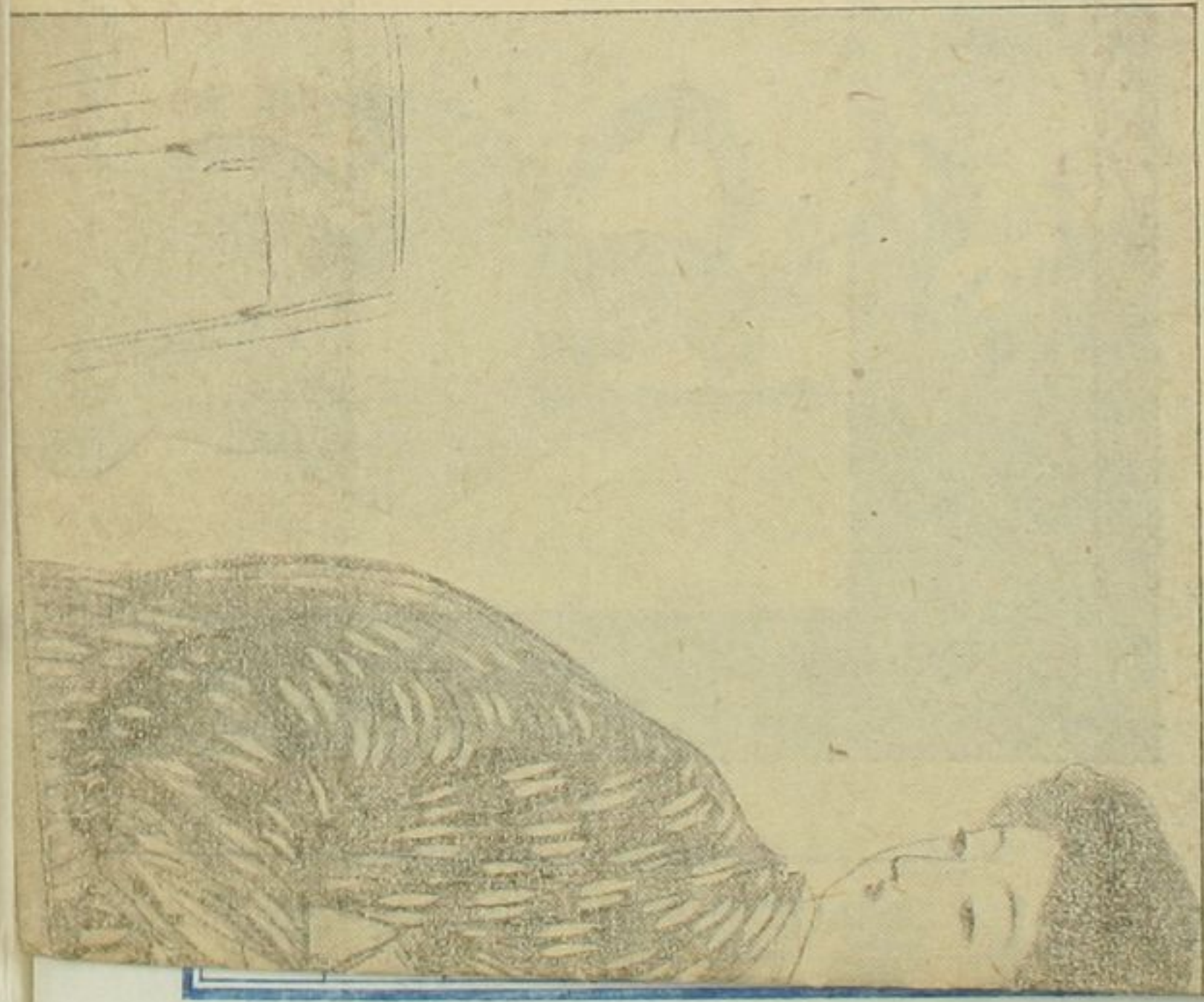
六割に相當するに過ぎないけれども尙且世界第一の木造大建築物云ふことが出来る是れ實に日本の誇であるといふことが出来る。



創建當時の大佛殿模型  
本佛殿は天平年間、聖武天皇が建立せられた最初の大佛殿の正面と横面との模型である、今の大佛の頭と天井とは殆ど接近して居るが此當時ではその大佛が中に小さくシロンホリと見ゆる、以て其の如何に殿蓋の大きかつたか、想像し得られるであらう、序に今の大佛殿は間口百八十八尺一寸、奥行き百六十六尺八寸で建坪八百七十七坪七合で、屋根坪が二千二百五十六坪四合即ち田畑に直すと七町五段二畝半になるさうだ。

に踏しないもの上に今度一對の尾が載せられたことも如何にも云ふに難い。是れも元來此の大佛殿に關しては、聖武天皇の御願慮であらせられたことも言ひ傳へられて居るが儘に事實である。唐代の建築に關しては今日其の遺物が残存して居ないから確言することは出来な。最大の建築物として今日残存して居るものは北京城内の大和殿。殿——我國の大極殿に相當するものであつて是が一番大きい、その様式は大佛殿と同じく三重屋根の四阿造りで棟上には鸞尾が載つて居る、之は天平。面積は二分の一に過ぎず而も之が支那全土を通じて第一の建築なのであるから實際此の奈良の大佛殿は儘に支那に其の比倫を見ない。六割に相當するに過ぎないけれども尙且世界第一の木造大建築物云ふことが出来る是れ實に日本の誇であるといふことが出来る。

時代源頼朝の御願慮であらせられたことも言ひ傳へられて居るが儘に事實である。唐代の建築に關しては今日其の遺物が残存して居ないから確言することは出来な。最大の建築物として今日残存して居るものは北京城内の大和殿。殿——我國の大極殿に相當するものであつて是が一番大きい、その様式は大佛殿と同じく三重屋根の四阿造りで棟上には鸞尾が載つて居る、之は天平。面積は二分の一に過ぎず而も之が支那全土を通じて第一の建築なのであるから實際此の奈良の大佛殿は儘に支那に其の比倫を見ない。六割に相當するに過ぎないけれども尙且世界第一の木造大建築物云ふことが出来る是れ實に日本の誇であるといふことが出来る。



さきに、敏夫の方で、母の感情が融和  
 として、結婚をする都合になるまで、家  
 におくといふ約束が、雙方の間に成立  
 つたのであつたが、やつぱり約束さほ  
 りには履行がでななかつた。  
 養家にあるあひだ、お君は養父母に  
 服な顔をされながら、まだしも時々敏  
 夫と逢ふ機会のあるのが楽しみであつ  
 け、ほんやりしてゐるお君を見  
 ると、何さか思つたか急に顔を擧  
 げ、お前はをこに何してゐんだ。  
 お君はあわて、椅子を離れた。  
 て、ここに名刺がございますと、  
 こゝへ住込むことになつたのであつた  
 が、来てみるよ、主人の院長はお君が  
 御座にゐる時分に、人をつれて時々敏  
 夫に來たごのがある顔で、院長の方  
 にお君に薄々記憶があつた。  
 今お君は總行の入口まで送り出  
 のか。

七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 百

